

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL.01004)

近代科学はこのままでいいのか  
－ゲーテが描くもう一つの近代－

(思想・文学分野)

ゲーテとエッカーマンの語る  
ドイツ人と日本人

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2013年11月18日開催の第4回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

近代科学はこのままでいいのか

— ゲーテが描くもう一つの近代 —

## ゲーテとエッカーマンの語る ドイツ人と日本人

ヨーロッパの作家の中でも最も「東洋的」と評されるゲーテが現代に「再来」し、ドイツと日本を比較しながら、日本的集団主義と個人主義、かつて世界に類を見ない循環型社会を形成していた日本と現代の日本等について、文明論的立場からエッカーマンと語る。

京都大学名誉教授・平安女学院大学教授の高橋義人先生がゲーテ役を、また平成 24 年度日本学術振興会「育志賞」に輝く気鋭のドイツ思想研究者、神戸大学人文学研究科講師の久山雄甫先生がエッカーマン役を務める。

### 高橋 義人 (Yoshito TAKAHASHI)

1945 年栃木県生まれ。京都大学名誉教授、平安女学院大学教授。Internationale Goethe-Gesellschaft(国際ゲーテ協会)理事、日本ゲーテ協会理事、日本学術振興会専門委員、けいはんな学研都市・町づくり専門委員等を歴任。現在、日本学術会議連携会員、Gesellschaft für international Germanistik(国際異文化交流独文学会)副会長。



主著に『形態と象徴』(岩波書店)、『ドイツ人のこころ』(岩波新書)、『魔女とヨーロッパ』(岩波書店)、『グノーシス 異端と近代』(共著、岩波書店)、『グリム童話の世界』(岩波新書)、『10 代のための古典名句名言』(共著、岩波ジュニア文庫)、ゲーテ『色彩論 完訳版』(共訳、工作舎)などがある。

### 久山 雄甫 (Yuhō HISAYAMA)

1982 年生まれ。神戸大学人文学研究科講師。

ダルムシュタット哲学実践研究所研究員、日本学術振興会特別研究員、京都女子大学非常勤講師を経て現職。

専門はドイツ思想史、日欧文化比較論。平成 24 年日本学術振興会「育志賞」受賞。



## 目次

はじめに ～「君よ知るや南の国を」音楽鑑賞

### I ドイツ人と日本人に見る個人主義

- (1) 「フクシマ 50」を考える
- (2) public (公) と private (私)
- (3) 近代国家とは何か

### II ヨーロッパ的個人主義と日本的個人主義

- (1) ふたつの個人主義
- (2) きつい個人主義と柔らかい個人主義
- (3) 三種類の畏敬
- (4) 詩「いちょうの葉」に込められた思い

2013年11月18日開催

第4回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：ゲーテとエッカーマンの語るドイツ人と日本人

講演者：高橋 義人（平安女学院大学教授、京都大学名誉教授）

久山 雄甫（神戸大学人文学研究科講師）

（文中敬称略）

はじめに ～「君よ知るや南の国を」音楽鑑賞

ゲーテとベートーヴェン

高橋： ゲーテの「君よ知るや南の国を」という詩をご存じだろうか。これは、ゲーテの長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のなかに出てくる詩で、20人以上の作曲家がこれに曲を付けている。今日はベートーヴェンとヴォルフの曲を聴いていただきたいと思う。

ゲーテとベートーヴェンはほぼ同時代人で、ベートーヴェンのほうが21歳若い。ゲーテは画家でもあり、彼がイタリア・ルネサンスの絵画を好んだことはよく知られているが、彼は音楽にも思いのほか造詣の深い人で、若い頃にモーツァルトの生演奏を聴いたことがあるというのが彼の自慢だった。

ヴィーンとは違い、ゲーテが住む北ドイツでベートーヴェンの音楽が知られるようになったのは1810年頃になってからのことである。1811年5月4日、S・ボクスレーはヴァイマルのゲーテ宅で食後にヴィーンから来たオリバー男爵がベートーヴェンのピアノ曲を演奏したときのことを記している。その席でゲーテはこう述べた。「これがどんな音楽だか、君にも分かるだろう。荒れ狂うようだ。美しくて、ものすごい。（一中略）ベートーヴェンはすべてを一挙に掴もうとし、そのため音楽は形以前の根源的な世界のなかに入ってゆく。その細部にはかぎりない美しさがある。悪魔の仕草としか思われない箇所もあれば、優美で何ともすばらしい箇所もある。そんな箇所になると、悪魔もいたたまれなくなって逃げ出してしまうほどだ。追いつめられた者は死ぬか気が狂うしかない。他の道はない。恩寵はないんだ」(FA II-6, S.663)。

翌年の1812年、ゲーテはベートーヴェンと著名な湯治場であるテプリッツで会った。ベートーヴェンは彼の前でピアノを弾いた。1812年7月19日、妻への手紙のなかでゲーテはこう記している。「これほど集中し、これほど力にあふれ、これほど熱のこもった芸術家を見たことがない」(FA II-7, S.76)。

7週後の9月2日、ツェルター宛の手紙のなかでベートーヴェンの性格についてゲーテはこう記している。「ベートーヴェンとはテプリッツで知りあいました。彼の才能には驚かされるばかりでしたが、残念ながら彼はまるで抑制のきかない性格の持ち主でした。この世がひどいことばかりだと彼が思うのは間違いではありませんが、そう思うがゆえに、この世を自分にとっても他人にとっても生きづらいものにして

います。彼からは聴力が失われてしまっており、それが音楽的な部分を損ないはしないまでも、社交的な部分を損なってしまっているのは、やむを得ないとはいえ、まことに残念なことです。彼はもともと口数の多いほうではありませんが、この性格の欠点があるため、ますます口をきかなくなってしまっています」(FA II7, S.100)。

ベートーヴェンはゲーテの詩をもとにいくつかの歌曲を作曲し、ゲーテの戯曲『エグモント』についても、同名の劇音楽を作曲している。ゲーテの戯曲は 1775 年秋、ゲーテがヴァイマルの宮廷に入る直前、ゲーテのいわゆるシュトルム・ウント・ドラング(疾風怒涛)時代に書き始められた。オランダ独立戦争前夜、オランダのためにスペインの圧政に対して立ち上がった主人公のエグモントのなかに、シュトルム・ウント・ドラング時代の若きゲーテは、社会の不条理に反抗する英雄を見た。そしてこの反抗的な気分が、ベートーヴェンの気持ちにぴったり合致した。貴族の令嬢と相思相愛の関係になったものの、身分の違いゆえに結婚を許されなかったベートーヴェンは、神聖ローマ帝国の階級制度に強い不満を持っていたからである。



### 君よ知るや南の国を

君よ知るや南の国を  
暗い葉かげに金色のオレンジが輝き  
そよ風が青い空から吹きわたり  
ミルテは静かに 月桂樹は高くそびえる  
あの国を  
あそこへ あそこへ  
いとしい人よ あなたと一緒にいきたいのです

君よ知るやあの館を 円柱が屋根を支え  
広間は輝き 小部屋はほのかに光り  
立ちならぶ大理石の像がわたしを見つめ  
かわいそうな子よ どうしたのとたずねてくる  
あの館を  
あそこへ あそこへ  
頼れる人よ あなたと一緒にいきたいのです

君よ知るやあの山を 雲の懸路<sup>かほじ</sup>を  
ラバは霧のなかに道を求め  
洞窟には龍の古い一族が棲み

切り立った岩壁に滝が流れている

あの山を

あそこへ あそこへ

わたしたちの道が通じています 父よ 一緒に行きましょう

(『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』から、高橋義人訳)

~~~~~

高橋： 「君よ知るや南の国を」の「南の国」とはイタリアのことである。「君」はドイツ人で、「暗い葉かげに金色のオレンジが輝き／そよ風が青い空から吹きわたり／ミルテは静かに 月桂樹は高くそびえる」。そういうあの国を君は知っているか、と詩人は呼びかけつつ「あそこへ あそこへ／いとしい人よ あなたと一緒にいきたい」と歌う。ここに出てくる「金色のオレンジ」はドイツにない。「そよ風が青い空から吹きわたり」。こういう感覚もドイツにない。ミルテの白い花も月桂樹もない。イタリア旅行に行つて初めてゲーテはこれらを知る。

イタリアに旅したゲーテと同じ気持ちを、ドイツ人はEUの前段階であるECができたときに味わった。ヨーロッパ各国の多くはいまEU(ヨーロッパ連合)に属しているが、EUの前身はEC(ヨーロッパ共同体)だった。EUが発足するのは1993年だが、その5~6年前には、ECという経済的共同体をEUという政治的共同体にまで発展させることの是非をめぐる議論が盛んだった。その頃、私は西ドイツのメアブッシュというところに住んでいた。ベルリンの壁崩壊とドイツ統一の直前である。1987年、私は学会で知り合ったオランダの世界的に著名な学者の家に招かれた。食事の席で、「EUをつくるという議論が盛んだが、あなたはどうか」と尋ねたところ、「自分はアメリカでの講演で東海岸に行った際、東海岸のニューヨークでもカリフォルニアのグレープフルーツが食べられるのをなんとも羨ましいと思った。ところが1967年にECができると、オランダにいても、イタリアのおいしい果物が食べられるようになった。こんなによい制度はないというのが、ここに暮らす人々の実感だ」という答えが返ってきた。

ドイツやオランダはヨーロッパのなかでも北方に位置している。そこに住む人たちの南方に対する憧れはとて強い。金色に輝くオレンジ、どこまでも青い空、女神アプロディーテーに捧げるミルテ、古代ギリシア・ローマの競技会で優勝者に授けられた月桂冠は、強い憧れの的だった。ドイツ人が共有するそういう思いが、ゲーテの詩の第一節に表れている。詩「君よ知るや南の国を」が有名になったのは、この詩が多くのドイツ人のイタリアに対する熱い想いを代弁しているからである。

第二節には「君よ知るやあの館を 円柱が屋根を支え／広間は輝き 小部屋はほ

のかに光り／立ちならぶ大理石の像がわたしを見つめ」とある。この館は北イタリアのヴィチェンツァ郊外にあるヴィラ・ロトンダを指している。ヴィチェンツァは「パラディオの町」と言ってもいいような町で、ヴィラ・ロトンダをはじめ、パラディオの有名な建築がいくつもある。イタリアから帰ったら、自分の住むヴァイマルの町をヴィチェンツァのような町にしよう、ゲーテはそう思いながらヴィチェンツァの町を詳細に観察した。ヴァイマルにあるゲーテの家は大邸宅だが、その玄関部分はパラディオの建築を真似て彼自身が設計したものである。

オーバーベックが描いた「イタリアとゲルマニア」という有名な絵がある。

この絵が描かれたのは1828年のことだが、その当時、イタリアという国もゲルマニアという国もなかった。10世紀から数世紀にわたってイタリア王国は存在していたが、その後イタリア半島では、ヴェネツィア共和国、ジェノヴァ共和国、ナポリ王国等の幾多の小国が消長を繰り返しており、ふたたびイタリア王国ができたのは1861年のこと



オーバーベック「イタリアとゲルマニア」1828  
／バイエルン州立絵画コレクション

Public domain, via Wikimedia Commons

である。郷土意識の強いのがいわゆるイタリアの特徴である。日本ではよくイタ飯やイタリア料理というが、イタリア料理というのは外国から見た呼称で、イタリアではナポリ料理、ポローニャ料理とは言っても、イタリア料理とは滅多に言わない。

他方、ドイツが生れたのは1871年、イタリア王国成立の10年後のことである。ただしその前身は1495年成立の「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」に遡る。「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」のその前は「神聖ローマ帝国」であり、さらにその前は「フランク王国」、現在のフランス、ドイツ、オーストリア、ローマ以北のイタリア、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、スイス、スロベニアに相当する地域だった。フランク王国時代、イタリア語、フランス語のようなラテン系言語ではなく、ドイツ語、オランダ語などのゲルマン系言語を用いるゲルマン人たちが theod (deutsch の古形) と呼ばれた。ドイツ (Deutschland) の語源である。他方、英語ではドイツを Germany、



ドイツ語を German というが、これはゲルマンを意味する。つまりドイツ帝国の誕生は新しくても、ドイツ人という意識は古くからあった。

神聖ローマ帝国当時、ヨーロッパの半分近くにも及ぶその広大な地域の北方にはドイツ語を話す人々が、南方のローマ以北のイタリア北部にはイタリア語を話す人々が住んでいた。それが、ドイツとイタリアの親密な関係の始まりである。オーバーベックの「イタリアとゲルマニア」には両者の関係が分かりやすく図示されている。両者は顔を寄せ合い、手を重ねている。左側で月桂冠をかぶっている女性がイタリアで、その背後にはイタリアのロマネスクの教会とアルプスの山々が見える。そのイタリアに問いかけているように見えるのが右側の金髪の女性で、その背後にゴシックの大聖堂を思わせる尖塔があり、彼女がドイツを示していることが分かる。

この絵は明らかにドイツとイタリアの相思相愛の関係を描いている。しかし本当に相思相愛なのか。実際はドイツのイタリアに対する片思いなのではないか。そう思う人は少なくない。「イタリアとゲルマニア」の作者オーバーベックは、1789年、北ドイツのリューベックに生れたドイツ人で、1810年にローマに移住し、1869年に没するまでローマにとどまりつづけた。「イタリアとゲルマニア」は画家の友人の依頼で描き始められ、もともとは「スラミスとマリア」という題のこの絵を、友人の死後、オーバーベックは題名を「イタリアとゲルマニア」と変え、絵も描きなおした。

イタリアはギリシアと並び、ヨーロッパ文化の源泉であり、イタリアに憧れるヨーロッパ人はとても多い。だが、神聖ローマ帝国時代からの深いつながりがあるためか、イタリアへの憧れは特にドイツに顕著である。そしてそれを象徴するのが、ゲーテの「君よ知るや、南の国を」なのである。

それでは、これから久山雄甫先生と一緒に「ゲーテとエッカーマンの語るドイツ人と日本人」について話をさせていただく。今回はゲーテによる近代科学批判をテーマにした。近代科学を生み出したのはむろん近代であり、そこで、ゲーテは近代をいかに捉えていたのかという問題を中心に据えて、近代の解明に努めたゲーテと、同じく近代と伝統のあいだで揺れ動いた日本を対比させてみたいと思う。

今日も、ゲーテとエッカーマンが現代日本にいたらどう思うか、という架空の設定の下、私がゲーテを、久山先生がエッカーマンを演じる。

―― 以下、ゲーテ(高橋氏)とエッカーマン(久山氏)の会話 ――

## I ドイツ人と日本人に見る個人主義

### (1) 「フクシマ 50」を考える

エッカーマン：福島での原発事故の後、「フクシマ 50」という言葉が世界的に有名になりま

したが、それからうかがいたいと思います。ゲーテさん、あなたはこの「フクシマ 50」という言葉をご存知ですか。

ゲーテ：いや、知らないよ。何だね、それは。

エッカーマン：福島で原発事故が起きた後、約 800 人がその復旧作業に当たっていましたが、原子炉 4 号機で爆発が起きたため、東電は彼らに避難を呼びかけました。しかし 50 人はあえて指示に従わず、原発事故の被害の拡大を防ぐために現地に留まり、必死に頑張ったのです。その後、この 50 人の英雄的努力に触発され、現地作業員の数はもっと増えたと言われています。そして、日本や外国のメディアはこれら現地作業員のことを「フクシマ 50」と呼んだのです。

ゲーテ：それはすごいことだね。50 人はみな自発的に現地に留まったのかね。

エッカーマン：自発的に留まった人もいれば、解雇を恐れて留まった人もいます。いずれにせよ、外国のメディアは彼らの自己犠牲的行為を高く評価し、スペインは彼らにアストゥリアス皇太子の平和部門賞を授けました。しかし日本では、彼らはまだ何の賞ももらっていません。外国での評価のほうが高いのです。

ゲーテ：なるほど。「フクシマ 50」というのは、日本人にとってはある程度当たり前のことかもしれないが、欧米の人々にとっては驚天動地の出来事だったというわけか。君はジェリコーの描いた「メデューズ号の筏」という絵を見たことがあるかい。

エッカーマン：ジェリコーは、私たち（ゲーテとエッカーマン）と同時代のフランスの画家ですね。でも、私はその絵を見たことがありません。

ゲーテ：メデューズ号はフランス艦隊の一艦で、アフリカのセネガルに向かって出航したが、途中で座礁してしまった。破廉恥なことに、救命ボートに乗って脱出したのは船長をはじめとする身分の高い人たちだけで、身分の低い者たちは筏に乗って何日も海上を漂流し続けなければなかった。当然、水も食料もない。絵の中には筏の上で死んでいる人の姿がたくさん見えるだろう。最初は 150 人もいたが、漂流 13 日目に救助されたときには、15 人の生存者しかいなかった。その話が描かれているんだ。

エッカーマン：150 人が 15 人になるとは、ひどい話ですね。でも筏で漂流した人々と「フクシマ 50」は違うでしょう。「フクシマ 50」には自分の意志で残った人もいましたから。



ジェリコー「メデューズ号の筏」1818-1819  
/ルーブル美術館所蔵 Public domain, via Wikimedia Commons

ゲーテ：違うよ。わしが比べているのは、救命ボートで逃げ出した船長たちと「フクシマ 50」のほうだよ。君はどちらが人間的だと思うかね。

エッカーマン：逃げだした船長と「フクシマ 50」を比べたら、決まっているでしょう。メドゥーズ号の船長たちには難破の責任があるわけですから、逃げ出してはいけなかった。彼らはエゴイストです。「フクシマ 50」のほうははるかに人間的ですね。

ゲーテ：まあ、そうだろうね。ところが一般にはヨーロッパ人のほうが人道主義的で、日本人は人道主義的ではないと思われているのだよ。

エッカーマン：それは個人主義と関係があるのではありませんか。日本では昔から「滅私奉公」という考え方が高く評価されていますが、欧米では、日本人が「私」を捨てるのは個人主義的ではない、個人主義的でないから人道的ではないと、考えられてしまうのではないのでしょうか。

ゲーテ：しかしねえ、「私」を捨てて他者のために尽くすことは、一番「私」を生かすことじゃないか。

エッカーマン：あなたはそう仰るかもしれませんが、「私」を捨てて他者のために尽くすことは、ヨーロッパ人にとってはとても難しいんです。

ゲーテ：そうとも限らないさ。私たちの死後、蒸気機関車や電車というものができただろう。電車はよく満員になることがある。満員電車の中で老人や女性が来たら、ヨーロッパ人だって席を譲るだろう。ささやかだが、あれだって「私」を捨てて他者に尽くすことだ。だが、そういう美德は日本のほうが進んでいるのかもしれないね。

エッカーマン：日本とまとめて仰いますが、日本でも首都圏では老人が来ても席を譲る人が少ないそうです。

ゲーテ：そうかね。東京は大都会だし、大都会の人はどうしても個人主義的になる。京都や大阪も大都会だが、関西の人間はもっと親切だよ。共同体意識が強いからね。

エッカーマン：ヨーロッパ人の共同体意識についてはどうお考えですか。

ゲーテ：東京と同じように、大都会ではどうしても共同体意識が稀薄になってしまう。わしがフランクフルトのような大都会を捨ててヴァイマルのような田舎町に引っ越したのも、ひとつにはそのためだよ。

エッカーマン：ああ、そうだったのですか。あなたは田舎のほうがお好きだったのですね。たしかに今でもヴァイマルの人たちのほうが大都会のフランクフルトの人たちよりも親切だなと感じることが時々あります。

ゲーテ：そうだ、親切ということが大切なのだ。親切とは他者に対する配慮ということだよ。本来の個人主義は、じつは親切とセットになっている。他者に対する配慮を欠いた個人主義はただのエゴイズムにすぎない。君の言うように、メドゥーズ号の船長たちはエゴイストだったんだ。

## (2) public (公) と private (私)

エッカーマン：しかし、ドイツ人は個人主義的だと言われていますが、ただのエゴイストでしかないドイツ人が今日とても増えているんじゃないですか。

ゲーテ：そうだとすれば、それはとても残念なことだね。ヨーロッパ人のなかでもドイツ人は親切だと言われることが多かったと思うがね。

エゴイズムは資本主義の発達とともに増大した。その資本主義は、今でいう産業革

命の頃に栄えはじめた。わしの晩年のことだ。そして金儲けばかり考えている人には public (公) という観念が欠けている。public をわきまえていない private (私) はただのエゴイズム、偽りの個人主義だよ。人間は誰でも社会のなか、共同体のなかに生きていて、他人と協力しなければならない。村に井戸を掘るのも、飲み水のない町に水道を引くのも public だよ。

わしらの時代に残念ながら水道はなかった。上水道は古代ローマ帝国時代にはあったが、中世以降その伝統は廃れてしまった。わしはモーツァルトの音楽が好きだが、モーツァルトはパリ旅行中に水売りから買った水で下痢に苦しめられたそうだ。パリには水道がなかったから水売りから水を買った。良心的な水売りもいたが、悪徳業者の水売りはセーヌ河の汚染された水を買っていたのだ。

エッカーマン：パリのことは私も友人から聞いたことがあります。セーヌ河には人間の排泄物がプカプカと浮かんでいて、河は黄色くなっており、臭くて堪らなかったと。現代でこそパリは「花の都パリ」と呼ばれて、大そう人気があるそうですが、私たちの時代、つまり 18 世紀～19 世紀のパリは「悪臭の漂うパリ」というイメージでしたね。その点、ゲーテさん、私たちが住んでいたヴァイマルでは、イルム川の水はきれいで、空気もよかったですね。

ゲーテ：町はだいたい川のほとりにできるね。ヴァイマルはイルム川のほとりにできた町、パリはセーヌ川のほとりにできた町だ。しかしヴァイマルが小さな町でありつづけたのに対し、パリは大都会になった。大都会ではどうしても川が汚れてしまう。そこでパリにも上下水道ができた。わしが死んでから 50 年も経ってからのことだ。しかし水道を引くなんて、個人の力でできる話ではないだろう。これは社会全体、国全体で取り組まなければならない仕事だ。これが public で、public は人間の生活の土台をなしている。

エッカーマン：水道を引くのが public だと仰いますと、日本のことを思い出します。日本には室町時代から上水道があったと聞いたことがあります。中世以降の世界史では、日本が上水道をつくった最初の国になるんだそうです。人の排泄物もちゃんとリサイクルするシステムがありました。そうすると、日本には昔から public と呼べる考え方があったということになりますか。

ゲーテ：public とは言わないが、日本人は「お上のため」「みんなのため」と言うんだ。「お上」とは主に領主のことだ。ヨーロッパと比べると、日本では「悪い領主」の数がずっと少なかったから、お百姓さんたちはお上に田畑の開墾や上水道の建設に駆り出されても、彼らは「みんなのため」と思い、あまり文句を言わなかったんだ。

エッカーマン：とてもよいお話ですが、でも「みんなのため」とばかり思っていたら、個人主義は育たないでしょうね。

ゲーテ：君は簡単に「個人主義」って言うけれど、20 世紀前半までの農村の生活はヨーロッパでも日本でもさして違わなかったのさ。ヨーロッパの農民もあまり個人主義的ではなかった。日本には「村八分」という制度があったけれど、ヨーロッパの農村でもよそ者や厄介者はひどく邪魔者扱いされたんだ。ヨーロッパで個人主義が特に発達したのは都市部、それもフランス革命以降のことだよ。

エッカーマン：では、フランス革命以前、あるいはその後もヨーロッパの農村の人たちはあまり個人主義的ではなかったとお考えですか。

ゲーテ：農民もそうだし、わしらが住んでいたヴァイマルの民衆だってそうだよ。彼らが考えていたのは自分たちの住む町のことだけさ。でも、ヴァイマルの町のなかでは、それぞれみんなのためを思い、みんなと仲よくしようとしていたんだ。

エッカーマン：日本人や、私たちが生きていたヴァイマルの町の人々が限られた範囲内で「みんなのため」を思っていたということはよく分かりますが、それは本当に public な精神と呼べるものでしょうか。

ゲーテ：重要な指摘だね。フランス革命以降、個人主義とともに public という精神が発達した。しかしその前には、町衆とか組合と呼ばれるもの、つまり民衆共同体があった。君はギルドという職業組合やハンザ同盟という都市同盟を知っているだろう。あれもそうした民衆共同体のひとつだ。ギルドやハンザ同盟にはもちろん立派な public 精神があったが、それは今日の public 精神よりももっと範囲の狭い public、身近で親しい仲間意識のようなものだったんだ。

エッカーマン：もっと身近で親しい心。あなたは日本人のなかに、そういう昔風の public、昔風の民衆文化が残っているとされるわけですか。

ゲーテ：よく分かったね。わしは庶民と交わるのが好きだった。君も知っているように、妻のクリスティアーネは花売り娘だった。庶民の一人だった。総じてわしは貴族よりも庶民のほうが好きだった。わしが自分の身分を隠してローマで民衆の中に溶け込み、ローマ市民の一人として振る舞えたのもそういう下地があったからだ。

エッカーマン：ゲーテさん、あなたがフランス革命をあまり好んでおられなかった、むしろ嫌っておられたのはよく知られていることですが、それはこのことと関係があるでしょうか。

ゲーテ：わしがフランス革命に批判的であったため、いろいろとわしの悪口を言う者がいた。ゲーテは保守的だとか、「自由・平等・博愛」の精神が嫌いだといった具合だ。しかし、わしは民衆が好きだったし、ヴァイマルの市民のために、わしのガルテンハウスのあるカール・アウグスト公の庭園を開放し、世界で最初の公園もつくった。他方、わしは戦争が嫌いで、フランス革命のような暴力革命を受け入れることはできなかった。君はフランス革命で本当にフランスが「自由・平等・博愛」の国になったと思うかね。

エッカーマン：いや、フランス革命の後、貴族と平民という身分社会に代って、ブルジョワ階級と労働者階級という別種の身分社会が出現したわけですから、少なくとも「平等」になったということではできませんね。

ゲーテ：君も知っているように、わしはフランクフルトの大豪邸からヴァイマルの小さな東屋に引っ越してきた。フランクフルトの家に比べたら、あの東屋は20分の1くらいの面積しかなくて、正直言って本を置く場所に困ったが、わしはあそこでけっこう庶民的な生活を楽しむことができた。晩年にはアウグスト公から町中の大きなお屋敷をたまわり、そこで言わばブルジョワ的な生活を送ったが、しかしわしには、ブルジョワジーとかセレブとかいう、あの鼻持ちならない連中を好きにはなれなかった。彼らは個人主義者だと言うが、エゴイストとしか見えない連中もいる。そういう連中のいう public はどうも胡散くさい。民衆のあいだで信じられている仲間意識のほうがよっぽど真実だと思うこともある。

### (3) 近代国家とは何か

エッカーマン：先ほど日本のことが話題になりましたが、ドイツと日本は近代化においてけっこう似た状況にあったんじゃないでしょうか。ドイツ帝国ができたのは1871年、他方、日本は1868年に明治維新を迎え、1889年に大日本帝国になったわけですから、両方とも同じ頃に近代的な国民国家として成立したわけですね。

ゲーテ：国民国家というのは、イギリスやフランスがモデルになっている。国民が主体になった国家のことだ。専制政治よりは国民国家のほうがたしかにいいだろうが、君は国民国家の時代になって、以前よりも平和になったと思うかね。

エッカーマン：そうですね、よくなったこともいろいろあったでしょうが、国民国家の時代

になってから大きな戦争が増えたことは事実ですね。国民国家の下でナショナリズムが強まらなければ、普仏戦争も、第一次大戦も、第二次大戦も起きなかったでしょう。

ゲーテ：そうだね。では、国民国家がもたらしたいい面とは何かね。

エッカーマン：国民主体の国家ができたおかげで、個人主義や public な精神が育ったということじゃないでしょうか。

ゲーテ：たしかにその通りだ。だが、その反面、国家の力が強まったため、国家は中央集権的になり、地方の力は縮小し、小さな町や村落の独自性が失われてしまった。古い民族共同体が破壊されてしまったんだ。

エッカーマン：ゲーテさん、あなたの考えられていることがようやく分かってきました。あなたのお考えでは、昔の人々はギルドのような組合や町内会のような小さな共同体に属していた。ところが、フランス革命以降、国家がとても強大になり、かつてあった小さな共同体は生彩を失ってしまった。個人主義や public な精神の誕生は、それと並行しているというのですね。

ゲーテ：そうだ、その通りだ。しかも個人主義や public な精神が本当に機能しているとは言えない。民衆は国民になったのではなく、ただの大衆になってしまった。村や町や組合のことなら分かるが、国家という大きなことになると、一般の民衆はそれについて深く考えられないし、専門の政治家でも難しい。人々はどうしても世論や評判に流される。そこに大衆が生れたのだ。

エッカーマン：私たちが住んでいたザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国でも大きすぎますか。

ゲーテ：ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国は面積でいうと、日本の奈良県くらいの大きさだ。わたちの死後、ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国はドイツ帝国の一部になったが、ドイツ帝国の面積は、今の日本の1.5倍ほどもある。とても大きい。大きくなると、統治するのは大変だよ。

エッカーマン：小邦分立にはそれなりのよさがあったということですね。ドイツの前身は神聖ローマ帝国ですが、神聖ローマ帝国も実質的には領邦と呼ばれる国々の寄り合い所帯でしたね。



ゲーテ：フランスのヴォルテールが神聖ローマ帝国のことを、あれは「神聖でもなければ、ローマ的でも、帝国ですらない」と揶揄したが（ヴォルテール『歴史哲学序論』70章）、この言葉はけっこう神聖ローマ帝国の本質を言い当てているよ。神聖ローマ帝国はローマ・カトリックを守護する役割を与えられていたから「神聖」とされるのだが、実際には帝国内部の宗教はカトリックとプロテスタントに分かれ、ローマ・カトリックを「守護」するどころか、ローマの教皇と権益争いをするが多かった。支配圏がローマにまで及んでいるから神聖ローマ帝国と呼ばれ、「ローマ」の名がついているのだが、神聖ローマ帝国はドイツ人の国だったので、ゲルマン的ではあっても「ローマ」的ではなかった。これらはよく知られていることだ。

ヴォルテールの指摘で重要なのは、神聖ローマ帝国が「帝国ですらない」と言われていることだ。ヴォルテールがこう言うとき、彼の頭にあったのは、イギリスとフランスのような中央集権国家だった。イギリスの首都はロンドン、フランスの首都はパリである。しかし神聖ローマ帝国の首都がウィーンであったとは言えない。神聖ローマ帝国は首都のない国だったんだ。

エッカーマン：だからヴォルテールは、神聖ローマ帝国は「帝国ですらない」と言ったのですね。

ゲーテ：そうだよ。帝国と言われるには、国の中央に絶大な権力をもつ国王か皇帝がいて、その権力に国全土が従っていなければならないが、神聖ローマ帝国の皇帝の力は、一時期を除いて、それにはほど遠かったのだ。

エッカーマン：神聖ローマ帝国の皇帝は、江戸時代の日本の天皇と将軍のどちらに似ていると思われますか。

ゲーテ：君は面白いことを言うね。いい質問だ。神聖ローマ帝国の皇帝は、かつては絶大な権力をもっていたが、その後、次第にお飾りに近い存在になった日本の天皇よりは力をもっていたとはいえ、実際の政治は、各領邦の国々に任せることが多くなった。そういう意味では、江戸時代の将軍に近い。そして神聖ローマ帝国の領邦は、江戸時代の藩に似ているかもしれない。

エッカーマン：神聖ローマ帝国の領邦と江戸時代の日本の藩が似ているのですか。それは面白い指摘ですね。

ゲーテ：けっこう大事な問題だね。イギリスとフランスはロンドンとパリにすべてが集中している中央集権国家だが、ドイツと日本は地方を大事にする多次元国家だったのだ。

ドイツでは、ベルリン以外に、ハンブルク、ミュンヘン、ケルン、フランクフルト、シュトゥットガルトなどが各地方の中心都市だったし、日本では東京以外に、仙台、金沢、名古屋、大阪、京都、福岡などの都市が地方性をよく発揮していた。しかし今ではドイツも日本も中央集権化しつつあるね。

エッカーマン：領邦や藩に対し、ドイツや日本という国組織になると、統治するのが大変ではありませんか。

ゲーテ：そりゃ、もちろん大変だよ。みなドイツや日本にはドイツ人と日本人が住み、みなドイツ語と日本語を話すと思っている。ドイツ語と日本語を話しているというのはその通りだが、そこに住んでいる人々は、ドイツ系、日本系であっても、純粋なドイツ人でも純粋な日本人でもない。純粋なドイツ人、純粋な日本人なんて一人もいない。でもみんな、自分は生粋のドイツ人、生粋の日本人だと思っている。特に日本には天皇制というものがあって、天皇を敬愛することによって日本人は日本人になるんだ。あれはなかなかいいシステムだよ。

エッカーマン：イギリスの王政というものがまさにそうじゃありませんか。イギリスにはずいぶんひどい国王もいましたが、今ではイギリス人の多くは英国王を自分たちの父親のように思っているじゃありませんか。

ゲーテ：国王が国民の精神的な父親か母親になっている。これが君主制の大きな特徴だ。精神的な父親や母親がいると、国はやはりまとまりやすい。フランスでもルイ 16 世は、ルイ 14 世のような絶対君主ではなく、より国民の精神的支柱でありたいと願ったのかもしれないが、フランス革命によって王座から追われ、断頭台の露と消えてしまった。国王がいなくなったフランスでは新たな精神的支柱が必要になり、そこでナポレオンが登場したということも言えそうだ。

## II ヨーロッパ的個人主義と日本的個人主義

### (1) ふたつの個人主義

エッカーマン：明治時代に夏目漱石や森鷗外という日本の文学者がヨーロッパに留学しました。漱石はロンドンで、鷗外はベルリンで学び、そこでヨーロッパ的個人主義に出会い、二人とも辟易したようです。森鷗外が晩年に『渋江抽斎』という評伝小説を書いたのは、日本にはヨーロッパとは違った日本独自の個人主義があったことを示すためだったというんですが、どのくらい正しいのでしょうか。

ゲーテ：それは面白い話だね。しかし、夏目漱石や森鷗外がヨーロッパで出会ったのは、国民国家が成立した後の比較的近代的な個人主義だよ。

エッカーマン：それはもちろん、そうです。彼らは、ヨーロッパ人は自我の主張が強い、あるいは主張が強すぎると感じました。森鷗外は利己的個人主義の他に、利他的個人主義というものがあると書いていますが、鷗外がベルリンで出会ったのは利己的個人主義のほうが多かったのでしょうかね。

ゲーテ：個人主義は public とセットになっているのだから、本当の個人主義は利他的なはずだね。しかし、public とセットになっていない個人主義は利己的個人主義になってしまう。鷗外のその分類は面白いね。その分類が正しいかどうかは別として、とりあえずヨーロッパ的個人主義と日本的個人主義のルーツを探ってみたらどうかね。

エッカーマン：では、森鷗外が評伝を書いた渋江抽斎（1805-1858）から始めませんか。

ゲーテ：渋江抽斎という人は、江戸時代の無名の知識人だったんだらう。彼にもしも個人主義があったとすれば、それは明治の近代国家が成立する前の古い民衆共同体とセットになったものだったし、その共同体は国家などという大規模なものではなく、自分の村や藩だったということになるだらう。

エッカーマン：なるほど。渋江抽斎の個人主義が民衆共同体のなかの個人主義であったとすれば、ヨーロッパのそれは近代的な国民国家を踏まえた個人主義だったというわけですか。

ゲーテ：その通りだ。近代ヨーロッパの個人主義は、国家的権威に対して自分の権利と自由を守ろうとするものだ。近代的国家の前段階にあった日本に、そのような意味の個人主義はなかつたらう。

エッカーマン：近代以前の日本にそのような個人主義がなかつたというのは分かりますが、それなら、今の日本にはヨーロッパ的な個人主義があるんですか。

ゲーテ：ないね。だから日本には強力な政治家やリーダーが出ないんだ。ヨーロッパのように上の力が強ければ、下にいる者はそれに対抗しようとする。しかしリーダーの力が弱ければ、その分だけ下にいる者の抵抗力も弱まるだらう。日本ではお上に対抗するのではなくて、お上に協力しようとする人が多い。それが日本を、ヨーロッパではありえないような均質的で平等な社会にしている理由のひとつだ。

エッカーマン：平等な社会とはとても羨ましいことですが、そういう社会では自己主張がどうしても弱くなります。ところがヨーロッパ人の自己主張は強い。夏目漱石や森鷗外がヨーロッパ人の自己主張の強さに辟易したのは、そのためなんじゃないですか。

ゲーテ：ヨーロッパではどこでも自己主張が強いわけではないよ。自信のある国のほうが自己主張は強い。一般に大国のほうが自己主張が強い。そして都会と農村でも違う。夏目漱石はイギリスの首都ロンドンに、鷗外はドイツの首都ベルリンに留学した。大国の首都だったからこそ、彼らはヨーロッパ人の自己主張の強さに圧倒された。大国でない国々の人々はロンドンやベルリンよりももう少し控えめなことが多いよ。

エッカーマン：英独仏と他のヨーロッパの国々は違うというわけですね。

ゲーテ：違うことが多い。自己主張と個人主義はかならずしも同じものではない。立派な個人であるとは立派な人物だということだ。でも。立派な人物でもないのに自己主張ばかり強い人がいる。ああいうのは、ただの空威張りかエゴイズムだろう。でも、ヨーロッパのほうがアジアよりも自己主張が強いということは言えるだろうね。

エッカーマン：それもあって森鷗外は、個人主義には利己的個人主義と利他的個人主義とがあると言ったわけですね。

## (2) きつい個人主義と柔らかい個人主義

ゲーテ：ヨーロッパ的個人主義にも利他的個人主義があるのだから、ここでは自己主張の強い個人主義を「きつい個人主義」、他者との協調性を重視する日本的個人主義を「柔らかい個人主義」と呼んでみようじゃないか。

エッカーマン：「柔らかい個人主義」とはよい言葉ですね。しかし、それは誰かがすでに使っていた言葉ではありませんか。たしか山崎正和という日本の劇作家がそのような言葉を使っていたましたが、彼は森鷗外の研究者でもありました。

ゲーテ：山崎正和は森鷗外の研究者なのか。だとすると、「柔らかい個人主義」とは森鷗外の「利他的個人主義」の延長線上にあるものかもしれないね。それは、日本人特有の微笑み、優しさ、丁寧さ、おもてなし、親切さと密接な関係があるだろう。

エッカーマン：山崎正和氏が言っている柔らかい個人主義では、小グループや中グループが大事にされます。クラス会や町内会がたとえばそうです。それらのグループ内では、

みな互いの顔をよく知っています。ドイツ人だって、親しい知人や友人に挨拶するときには微笑みますよね。日本人は中小のグループ内でしょっちゅう微笑み、お互いに助け合っているから、誰に対しても微笑み、親切にするようになったとも考えられませんか。

ゲーテ：挨拶というのは重要な視点だね。たしかに挨拶するときには微笑する。それはヨーロッパでも日本でも同じだ。だが、ヨーロッパ人が挨拶するときには握手するのに対して、日本人はお辞儀するだろう。あれがヨーロッパ人と日本人の大きな違いだ。

エッカーマン：握手するかお辞儀するかって、単なる風習の違いじゃないんですか。

ゲーテ：風習の違いにとどまらないよ。ヨーロッパで握手すると、相手との距離が急に縮まるだろう。ところが日本人はお辞儀して、それ以上は近づかないのだ。

エッカーマン：お辞儀は、相手に対する敬意を示す動作ですね。

ゲーテ：その通りだ。だが、お辞儀は敬意を示すだけでなく、相手とのあいだの微妙な距離を保つことでもある。握手すると、相手とのあいだの距離がなくなってしまう。ところが日本人はお辞儀し、相手に敬意を示し、そうやって相手に近づきながらも、決して近づきすぎない。まるで日本人は、お辞儀しながら相手とのあいだの小さな空間を大事にしているかのようだ。

エッカーマン：その小さな空間には空気以外の何があるのでしょうか。

ゲーテ：われわれヨーロッパ人は空気しかないと思う。しかし日本人は明らかに何も無い空間を大事にしている、だからこそわれわれの眼に日本人は神秘的に見えるんだ。

エッカーマン：相手と自分のどちらか、君と私のどちらかが大事なのではなくて、君と私の「あいだ」が重要だということでしょうか。

ゲーテ：そうだ、その通りだ。日本人は君や私ではなく、君と私の「あいだ」が大事だと考えている。君か私のどちらかが主人公ではなく、「あいだ」こそが主人公であり、その「あいだ」のなかに君と私がいると捉えるのが日本人だ。だから日本人はヨーロッパ人のような個人主義者にはならないのだ。

### (3) 三種類の畏敬

エッカーマン：日本人がお辞儀しながら示す敬意というのは、あなたが『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のなかで言うておられる畏敬に似ていますね。

ゲーテ：そうだ。たしかにそうだ。わしは『遍歴時代』のなかで三種類の畏敬があると言った。それが何だか、覚えているかい。

エッカーマン：自分の上にあるものへの畏敬、自分の下にいるものへの畏敬、そして自分と等しいものへの畏敬の三つですね。

ゲーテ：その通りだ。自分の上にあるものとは、親や先輩や先生、そして身分が上の人たちのことだ。人間は生まれてくると、まず親を頼りにして生きる。自分の上にあるものへの畏敬は、人間が最初に抱くものだろう。

エッカーマン：もちろん最初は親でしょうが、親ばかりではありません。たとえば、子どもはお兄さん、お姉さんの真似をして生きます。これも上にあるものへの畏敬に入るでしょう。

ゲーテ：その通りだ。では、下にいるものへの畏敬とは具体的に何だろうかね。

エッカーマン：兄や姉の反対というと、弟や妹を大事にするということでしょうか。

ゲーテ：そうだ、そしてそれ以外には何だろうか。

エッカーマン：親の反対という子ども、あるいは部下への愛情でしょうか。でも、はたしてそれが畏敬になりますか。

ゲーテ：そりゃなるよ、第一に子どもは心が無垢だ。われわれのような大人よりもはるかに心がきれいだ。第二に彼らは無限の可能性、無限の未来を持っている。この二点で子どもはわれわれよりもはるかにすぐれている。育児や教育だって、自分の下にいる者に対する畏敬の念を持っていなければとうていできるものじゃない。いや、人は自分下にいる者を育てることによって初めて大人に成長すると言っていいくらいだ。

さて、自分の上にある者が親、自分の下にいる者が子どもだとすると、三番目の自分と等しい者に対する畏敬とは何だと思うかね。

エッカーマン：自分と等しい者に対する畏敬という、たとえば友だちに対する畏敬がぼそ

うですね。

ゲーテ：そうだ。人間は何よりも友人を持たなければならない。親しい友人のいない人は信用できない。人は、友人を通して他人を敬うことを学ぶのだ。

エッカーマン：友人は自分よりもすぐれている点を持っていますし、友人よりも自分のほうがすぐれている点があると気づかせてくれるのも、友情を通してですね。

ゲーテ：そうなんだ。友人がいることで、自分とは赤の他人に対する敬意を深め、精神的に成長することができる。場合によったら、友人の心の悩みを聞き、その悩みをわがことのように受け止め、友人の相談相手になることができる。

エッカーマン：『遍歴時代』のなかでは、三種類の畏敬の他に、さらに自己自身に対する畏敬というものがあり、それがこれら三つの畏敬を包含すると書かれていました。自己自身に対する畏敬とは、自信とは違うのでしょうか。

ゲーテ：自信とは少し違うね。わしはこれまで『若きヴェルターの悩み』、『タウリスのイフィゲーニエ』、『タッソー』らの作品で、自分は天才だという思いと自分はダメ男だという思いのあいだで揺れ動く人物を描いてきた。自分は天才だと思うのは自信過剰だし、自分はダメ男だと思うのは自信喪失だ。若い人はその両者の思いのあいだで揺れ動くものだ。わし自身もかつてはそうだった。でも、そうやって揺れ動きながらも、自分の上にいる人たち、自分の下にいる人たち、自分と等しい人たちと接することがある。そのなかには立派な人もいれば、ダメな奴もいる。でもやがて、みなダメな部分を持ちながら前に向かって生きている、みなそれぞれ何か気高いものを持っている、と気づかされる。それは別にダメな自分のなかにも光ったところがあるということではない。自分のなかにかにダメな部分があろうとも、今このときを生きていこうとする私が今ここにいる、私が今ここにいるということ自体が尊いということだ。

誰でも気になることがある。自分の貯金のこと、学校の成績のこと、運動の出来不出来が気になるだろう。でも、自己自身への畏敬を持つとは、そうしたものをすべて削ぎ落とし、自分の原点に立ち戻り、裸になった自分、空っぽになった自分を見つめることだ。その上で自分を肯定することだ。たとえいかなる苦難があろうとも、自分の人生を決然と生きていこうと意欲することだ。そう意を決すると、じつはみなそうやって生きていること、自分の上にいる人たちも、自分の下にいる人たちも、自分と等しい人たちも、みな自分の人生を前に向かって必死に生きていこうとしていると気づかされる。すると、家柄や能力といった自分の付随物ではなく、自分がこの世に生れ、この世に存在しているということ自体が尊いのだ、と分かる。そのとき、自分の

上にいる人たちも、自分の下にいる人たちも、自分と等しい人たちも、みな気高いのだ、ということがまるで天からの啓示のように得心されるにちがいない。

だから自己自身への畏敬とは自信のことではない。たしかに自分はダメ人間だと思っている人には生きる意欲が欠けているが、自信のある人には生きる意欲がある。そのため自信は自己自身への畏敬と同等視されがちだが、しかし両者は同じものではない。自信は、自分の付随物でしかない学校の成績や運動の能力などを過大に評価している。反対に、自己自身への畏敬ではそれらが削ぎ落とされている。それが、自信と自己自身への畏敬の大きな違いだ。

#### (4) 詩「いちょうの葉」に込められた思い

エッカーマン：日本人のお辞儀の風習から自己自身への畏敬まで、ずいぶん話が広がりましたが、もしかしてあなたは日本人がお好きなのですか。

ゲーテ：まあ、日本人のメンタリティがわしに合うことは確かだね。前に M・オステンという学者が「ゲーテは日本人だったのか」という刺激的な論文を書いたが、あの表題を見たときにはとても嬉しかったよ。あれはわしに対する最高の褒め言葉だった。日本人は自然をととても大事にする。おそらく世界で最も大切にする。そして君も知っているように、わしも自然が好きだ。わしにとって神と自然はほぼ同義語なんだ。

エッカーマン：そう言えば、あなたは以前に「いちょうの葉」という詩を書かれたことがあります。あれも日本に対する賛辞ではなかったでしょうか。

ゲーテ：公孫樹（いちょう）はケンペルによって日本から持ち込まれた樹だ。この葉は根元がひとつで、途中からふたつに分岐している。それを見たとき、わしにはピンと来るものがあった。そこであの詩を書いたのだ。わしの詩をいちど読んでくれないかね。

エッカーマン：『西東詩集』のなかの「ズライカの巻」にある詩ですね。大山定一訳で読んでみましょう。

~~~~~

#### ゲーテ「いちょうの葉」

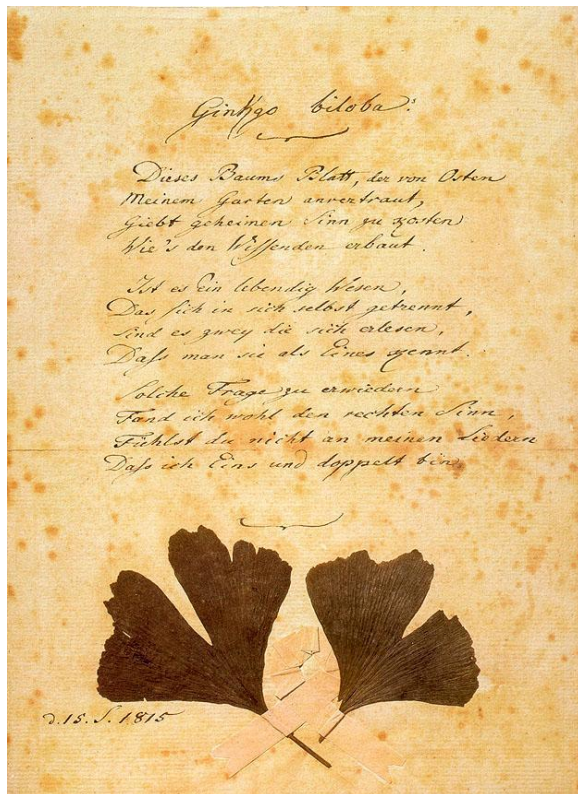
はるばる東方の国から移されたという  
これはいちょうの落葉だ  
いちょうの落葉には  
智者を満足させる深い意味がふくまれている



これは一枚の葉がさかれて  
二枚になったのだろうか  
それとも 二枚がたがいに結びあって  
一枚の葉になったのだろうか

この問いにこたえるために  
ぼくはちょっとうまい考えを思いついた  
ぼくの歌を聞きたまえ  
ぼくもまた一枚と二枚であるいちょうの葉にみえないか

(大山定一訳、人文書院「ゲーテ全集」第一巻、1960年)



ゲーテ直筆 Ginkgo biloba の詩  
/デュッセルドルフ・ゲーテ博物館  
所蔵 Public domain, via Wikimedia  
Commons



エッカーマン：最後に、この一枚であると同時に二枚であるがありますが、これは、恋人同士が二人にしてひとつであるということでしょうか。

ゲーテ：恋人同士だったら、「ぼくも」ではなく、「ぼくたちも」になるだろう。「ぼくも」としたのはなぜだと思ふかね。

エッカーマン：最初の「はるばる東方の国から移された」というところを読みますと、ここでは東洋ということが特に重視されているように読めますが。

ゲーテ：そうなんだ。わしはずっと東洋に関心を持っていた。だからこそ「中国風ドイツ暦」や「いちょうの葉」のような詩を書いた。さっき、「日本人は、お辞儀しながら相手とのあいだの小さな空間を大事にしている」と言っただろう。自分と相手のあいだの小さな空間を主体にしたら、それは一であると同時に二なのだ。自分のなかには他者が内包されているということなんだ。そうやって包みこんで話すことができたなら、相手の人もなぜか心がほっとするだろう。欧米人が日本に来ると、多かれ少なかれ顔つきが穏やかになるのはそのためだ。みんなこの小さな空間のなかに包みこまれ、自我を主張しなくてもよくなり、かえって心が開放されるんだ。

エッカーマン：もしかして、日本にあるような「柔らかな個人主義」が昔のドイツにもあったということはないでしょうか。だとしたら、「ぼくもまた一枚と二枚である」とは、西洋も東洋もひとつという意味ではないんですか。

ゲーテ：君はいいことを言うね。そうだよ。その通りだよ。わしのなかにも東洋的なものがある。でも、それだけじゃない。わしのなかにはキリスト教的なものもイスラム教的なものもある。カトリック的なものもあれば、プロテスタント的なものもある。そして昔はみんな多かれ少なかれそうだったのかもしれない。今ほど分化が進んでいなかったのかもしれない。「ぼくもまた一枚と二枚である」とは、自分が西洋的でもあれば東洋的でもある、キリスト教的でもあればイスラム教的でもあるという意味だ。昔の人々はきっとそれに近かった。でも、今日、そういう時代に戻ることはとても難しくなってしまうている。

エッカーマン：日本という国は神仏習合といって、神道と仏教という二つの宗教を混ざり合わせています。西洋もそうしたほうがいいということですか。

ゲーテ：それは素晴らしいことだね。誰がそういう賢いことを考えだしたのかね。西洋でももしもそういうことができたなら、キリスト教とイスラム教とユダヤ教の対立も、カトリックとプロテスタントの対立もなくなり、世の中はずっと平和になれただろうに。西洋の人々が宗教的に寛容になれないのは残念なことだね。

エッカーマン：日本に学ぶべき点はまだまだたくさんありそうですね。ゲーテさん、今日はいろいろなお話をありがとうございました。そして、聴衆の皆様も、どうもありがとうございました。

発行日	2023年11月30日
講演著者	高橋 義人 久山 雄甫
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)